



いのちがあつての 喜怒哀楽

喜怒哀楽というものは、目が覚めて後のことであり、
喜怒哀楽を土台にしてはならんとしみじみ思うのであります
(四代金光様のお言葉から)

とり つぎ 金光教では「取次」を 大切にしています

「取次」とは、人と神さまの間に「取次者」がはいり、人の願いを神さまに祈り、また神さまの願いや思いを人々に伝えることをいいます。

金光教は、神さまが「悩み苦しんでいる人を『取次』で助けてくれ」と、農民である教祖さまに頼まれたことから始まります。

この「取次」で、多くの悩み苦しんでいる人が助かりました。

私たちは、「取次」を最初に始めた教祖さまを「金光大神」とお呼びしています。

「取次」は、教祖金光大神さまが取次を始めた江戸時代末期から現在まで、海外を含む約1500の教会で行われています。

てん ち がね の かみ 「天地金乃神さま」 (一生死なない父母)

金光教では神さまと私たち人間の関係を親と子の関係にたとえます。天は父、地は母であり、親は神さま、子は人間、この親子の関係は切っても切り放すことが出来ない関係です。

あなたの周りに目を向けてください。お父さん、お母さん、子どもたち、親しい友人…。

山や海、川、そこに暮らす動植物たちを含め、あなたを取り巻きさまざまなのちが、あなたを生きし、支えてくれていることに気づくでしょう。

人間をはじめ、あらゆるものをととのえ、生かし、育てようとする天地のいのちを、私たちは「天地金乃神さま」とお呼びしています。

生かされて生きている私。かけがえのない貴重な人生。「生まれてきてよかった」と、喜びいっぱいと言えるような幸せに天地金乃神さまは導いてくださいます。

ケータイサイトはこちら ▶

Webでチェック!

金光教

検索

◆ e-mail w-master@konkokyo.or.jp ◆

MEMO

喜いのち喜

此方の話を聞いて、それでおかげを受ければ、神も喜び、氏子も喜び。
(教典・理3 御理解拾遺 4から)

©2009 Konkokyo

怒いのち怒

腹が立つ時には、心の鏡を磨いてもらうように、神様を頼む心に改めるがよろしい
(教典・理1 山本定次郎 59から)

©2009 Konkokyo

哀いのち哀

人の身に痛しかゆしということあるものなり。なければ哀れみなし
(教典・理3 教祖御理解 34から)

©2009 Konkokyo

楽いのち楽

痛いのが治ったのでありがたいのではない。いつもまめながありがたいぞ。
(教典・理3 金光教祖御理解 46)

©2009 Konkokyo

喜怒哀楽。
喜びと怒り、悲しみと楽しみ。
人間の、さまざまな感情。

いまあなたは、どんなかおをしてますか？
うれしいことも、はらがたつことも、かなしいことも、たのしいことも、
すべて今日のいのちがあるからこそ。
いのちをいただき、あらゆるもののお世話になって、私たちは生きています。
お世話になっているすべてに「お礼を言う心」
うれしい時も、腹が立つ時も、かなしい時も、楽しい時もそれを忘れないように。

